

NEWSLETTER

THE JAPANESE SOCIETY FOR
PARAPSYCHOLOGY

FEBRUARY

No. 22

J. B. Rhine 博士逝く

超心理学のまの親であり、名実共に世界最高の指導者である Joseph Banks Rhine 博士がこの2月20日に逝去された。享年84才。本学会は早速平電を打ち、心から哀悼の意を表しました。博士の半世紀以上にわたる超心理学への貢献と他の多くの領域に及ぼした測り知れぬ影響を考へるとき、まことにかけがえのない存在を失ったことは痛感にたえません。博士は、1995年9月28日 Pennsylvania の Juniata に生まれ、Chicago 大学に学び、1920年現在妻 Louisa Ella Weckesser と結婚。1923年 Boylston Institute で植物生理学の research fellow、1924年 Virginia 大学講師となり、1927年夫妻は Duke 大学へ移り有名なギリシア心学者 William M. Duggan の指導のもとに超心理現象の研究に着手し、以後、1930年 assistant professor、1934年 associate professor となり、この年 parapsychology Laboratory を創設、これでの研究をまとめた最初の報告、Extra-sensory Perception が発表されました。1937年からこの年の編集となり、Journal of Parapsychology を発刊し、更にこの年は、超心理学において用いられた統計的詳細の方法が厳正なものであること、American Institute of Mathematical Statistics によつて承認された画期的な年でもありました。1938年には予知、1943年には PK の実験が初めて報告され、1940年代には超心理学の基礎が築かれます。1957年には parapsychological association を創設し、専門の研究者の教壇では、PSI のいろいろな性質が次々に発見され、かくして1960年代を迎えることとなります。それ以後現在まで超心理学は、他の領域の発展と相俟つて多様化の時代に入るわけであり、1968年の Parapsychology Today、1971年の Progress in Parapsychology の編輯はこれを象徴するものとして取り上げました。博士の著作には上述のものの他に、1947、The Reach of the

Mind; 1953、New world of the Mind; 1957、Parapsychology, Frontier Science of the Mind; 1960、Extra-sensory perception after sixty Years (以上2冊は訳著) などがああります。

学会ニュース

先、40回例会研究会は1980年2月17日(日) 10.00~16.00の向学舎会館本館にて開催。出席者はア・ブ・ソ・金・渡・基・聖・泉・敏・雄・松・田・行・小・川・雄・大・谷・宇・司・佐・木・茂・美・呂・芳・一 の8名、下前中は将来の研究動向について、長期(10年)と本年度の2つに分けて討議が行われ、いろいろ有益な意見が出された。これはさらに3月の例会に引続き討議するとの予定がある。先号には通称の向学舎会館に、1979年 電通大学教授の佐々木博士と電通大 PSI 研究会の小川雄二氏が来られ、佐々木氏による念力少年の念力変形実験についてのスライドを用いた大変興味深い報告があり、その後でディスカッションが行われた。(2頁参照)。

お知らせ

先、41回例会研究会

下記要領の3月研究会を開催します。

日時: 1980年3月16日(日) 10.00~16.00

場所: 学舎会館 東京都千代田区神田錦町3-1-25

03-292-5931 地下鉄東西線竹橋下車

議題: 年度動向について(続)

論議: Handbook of parapsychology

担当 呂芳一

報告: ESPに対する外的刺激の効果(続)

報告者 大谷宗司

NEWSLETTER OF JSPP No.22, 1980.2.17 発行
 © 編集発行 日本超心理学会 (定価200円)

PKによるmental bendingについて

— 佐々木英夫博士の談話より —

佐々木博士はかなり以前から超常現象に大きな関心をもち、科学者としての立場から人的研究を進められていた。ところが数年前、超能力者エリ・ゲラーが来日し、それを契機として日本各地に念力少年少女が輩出、スプーン曲げ、念字などいろいろな超能力の実験が行われるようになった。氏は研究会を作り他の人々と協力して、何人かの少年にPK実験を試み、その物理的性質の幾つかを発見されたのである。教授は従来、PSI研究がPSIの心理的性質についてはかなり知られているのに対し、物理的性質はまだ十分研究されていないことに注目され、物理学者としての立場からこの謎に挑戦された。そこでPSI energyの物理的性質解明のため3つのテーマ、1. PKによるmetal bending 2. thoughtgraphy 3. PSIのtime variationをとり上げられた。此等3つの研究を通して自然界に普遍的に存在するPSI energyの発生・増幅・蓄積・伝達・適応・時間的・空間的拡散をしらべ、PSIによる治療、PSI能力開発の訓練に役立てたいというのが氏の念願であった。今回の談話は主として1.に関してのものであり、スライドを用いて極めて興味深く、分りやすく説明された。実験手順にいうと、机の上の同じ高さの2本の木の箱にあらわに曲げかけた鋼鉄片を渡し渡しその中央に非磁性のステンレスの棒をとり、その重さを徐々に増加させるとともに、これを平行して念力を鋼鉄片に効かし、それによって通常の物理現象では起り得ない現象が生ずるかどうかを見ようというものである。装置は誤差を除くために単純にあり、詐術を除くためあらゆる方向から見ることを怠らな。超常現象は起こらな結果を見るとき通常は普通の現象と変わりがない。ところが結果へ到るまでのプロセスに何か特異な現象があらわれるのではないかという疑が注目をされた。鋼鉄片に10gずつ荷重を加えるに当たって念力も加えられる。最初は念力の影響があらわらな、30gを加えただけから荷重がはたかみか見らな、降下念力に近まれば超常能力をすでに流動能力の範囲内、あらわらクリープ現象にリザンする場合に於いてPK効果があ

らわらなると認められた。その念力により、一旦deflectionが正の方向にまじかると、次には負の方向に減らすと、ほとりの段階が見らな。これはnegative and active actionとして特徴づけられた。考察として、PKは試験材があらわに曲くはり、材料内部に塑性変形があり、エネルギーがたまっているとき出たことかいえる。(詳細は電通大PSI研究会: PKによる金属材料の変形現象について(参照)。つまり、全く力を加えず静止している状態にはPKは働きにくく、反発に抵抗作用や歪み材料中にあると動的なfactorがあるとき、それによって、PKが作用しやすいう。以上のプロセスはPKを作用させない通常の荷重変形では全然見らな現象であり、PKの存在と性質と特徴づけらな現象である。この結果の原因は勿論少年達の超能力によるものであるが、佐々木氏が実験者としてPK発見を促進するための能力と雰囲気作りが成功したことに由来する。氏はよくrelaxation, concentration, motivationの3つに重点を置かれた。被験者は当時小学生であらな、大学の学生達と一緒に進んでらな、実験中に結果を結果をカセットで流し、いろいろな努力がされた。氏の経験の中には、この他にも自身の念力能力、活字に下てらな水がPKを遮断すること、導体と絶縁体のある組合せ方で念力通ることなど大変興味深いものであらな。今後さらさらいろいろな分野の研究家の協力を得て、PKの本質の解明に努力したいということか語らな。尚、時間的に及らな、次は一回来談せるところか多か。PSIが物質とどのような相互作用を行らな。これは今後の大きな課題であり、物理学と心理学の両分野の研究家の緊密な提携が必要である。上述のPK deflection 効果とらな被験者の生理・心理的状態の記述が物理的実験と平行してあらわらならな。

(文責 金沢)

< 紹介 >

H. J. Irwin: Coding preferences and the form of spontaneous extrasensory experiences. J. Parapsychol, 43: 205-220, 1979.

紹介者 望原敏雄

L.ライン(1953)は、偶発性の超感覚的体験を、直観的印象型、知覚型象徴的心像型、現身的心像型の四型に分類している。しかし、一体なぜこのような型とよんでおられるのか。この問題を完全に分析するためには、受信者の心理力動、他の体験的認知活動、受け手超感覚的情報の性質といった要因を考慮する必要があるように思われる。本稿では、通常の意識的経験の下に描かれる心的過程を明確にし、こうした過程が偶発性ESP現象に与える役割を明らかにするとすれば、どのような役割を果たすのかという問題を解くことになる。これまでふた通りの情報のコーディングが認められている。ひとつは視覚的であり、もうひとつは聴覚的である。人間は、このふた通りのコーディングのいずれを用いることもできるが、特に一方のコーディングを用いる傾向のある場合には、認知型と呼ばれる。視覚的認知型をとる者を視覚型、言語的認知型をとる者を言語型と呼ぶこともある。最近、心理学では、大脳の両半球の機能が偏り始めることが問題にされているが、超心理学の分野にも、この種の研究がかなりみられるようになった。しかし、後位半球とESPとを関連づけようとする試みが多く、後位半球との関係はほとんど研究されていないのが現状である。

L.ライン(1953, 1954)の偶発性ESP体験の研究によれば、超感覚的情報は、大半がイメージ、特に視覚的イメージであることが示唆されている。また、パーシラー(1974)のデータによれば、偶発性超感覚的体験の6割方は、主に視覚的イメージであるように思われる。実験的研究では、サイの伝達に際して、視覚的ボードが用いられるらしいことがわかっており、視覚的ボードが、どのようにして偶発性ESP体験の型を決めるのか、という問題に倒しては、まだはっきりとわかってはいない。

その理由としては、これまでの研究者が、被験者の

視覚的イメージの能力にばかり焦点を合わせ、ふたつ視覚的イメージを用いているかどうかという点に肉して、注意を払っていないことがよく考えられる。

このような点をふまえて、「偶発性超感覚的体験で視覚的イメージ優勢の者は、通常の認知作業でも視覚的ボードコーディングを用いる傾向があるのか」という仮説の検証を試みる。

【方法】本研究では、被験者の知覚型を、ペイヴイオ(1971)による「思考法調査票」(WOT)を用いて評定した。被験者は、フェーリングランド大学で、入門心理学の講義を受講している学生であった。偶発性ESP体験の型を決定するためにあたっては、パーシラーの考察による調査票の簡略版を用いた。この調査票に記入した被験者にWOTも施行したところ、超感覚的知覚の体験者52名が残された。そのうち最終的に対象とした被験者は、「視覚的ESP」群と「直観的ESP」群をそれぞれ23名ずつ、計46名であった。

【結果と考察】検定の結果、偶発性超感覚的体験が主に視覚的イメージで知られている被験者は、WOTの下位尺度で、言語的尺度よりも視覚的尺度の平均パーセンタイル値が有意に高いことがわかった。直観的印象体験のあつた被験者では、視覚的尺度よりも言語的尺度の平均パーセンタイル値が高いと言えられた。

本研究からは、少なくとも、視覚的イメージが主になつたESPは、通常の認知活動で、視覚的ボードコーディングを習慣的にこなしている者に起る現象であると言えよう。このような結果は、超感覚的情報が意識にのぼる過程を限定して考えればESPも超常的な認知機能ではなさそうであるということもわかる。